

映画を使用した中級ドイツ語授業の実践例

吉 満 たか子

広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに

映画を教材として使用する目的は様々である。石出（2006）は、高等学校での「総合的な学習の時間」において「映画で世界を学ぶ」という講座を開講し、アメリカの奴隷制度を取り扱ったテレビドラマ『ルーツ』や、ナチスに対する抵抗運動を行った学生グループの「白バラ」を描いた映画『白バラの祈り』を観賞させた。生徒はそこで史実を学び、それらについて話し合い、レポートを作成することで、映画に登場する差別や迫害といった問題を他人事ではなく、自分自身の問題として考えることができた」と石出は報告している。また、浅尾（2011）は、高等学校の日本史の授業において、映画『あゝ野麦峠』と『蟹工船』を観賞させ、映画に登場する史実に関するレポートの作成や、映画と原作の比較とそれについての議論といったタスクを課している。浅尾は日本史の学力を「日本の歴史を材料に、疑問を持ち、事実を知り、意見形成し、討論し、批判され、さらに意見構築を試みる」という過程を通じて、この社会に生きる力を伸ばしていくもの」としてとらえ、そのための教材として上記の映画を使用している。外国語の授業における映画の使用例は、特に英語教育においては枚挙にいとまがないが、水澤（2016）や倉林（2017）など多くの実践研究はリスニングの指導に主眼を置いている。また、川崎／榎木（2015）や田畑（2016）のように語用論的な能力を指導することを目的として映画を使用することもある。

ドイツ語教育においては、佐藤（1998）による映画『ベルリン・天使の詩』を使用した例や山室（2017）によるアニメ映画『魔女の宅急便』のドイツ語版を使用した報告などがあるが、いずれもある程度ドイツ語を学んだ学習者を対象としている。というのも、初級ドイツ語の授業において映画を教材として使用する場合、学習者のドイツ語のレベルは、セリフを聞き取って理解できるまでには到達していないからである。例えばあいさつなど、授業で学習した決まり文句が映画の中で登場した際にそれらを認識することは可能ではあるが、映画から新たな表現や語彙を学ぶということは実際には簡単ではない。むしろ、ドイツ語圏の生活事情やコミュニケーションのスタイル、史実などを知り、学習への動機づけを強化・維持すること、あるいは映画で取り扱われている問題についてディスカッションをするといった、副次的な効果を期待するほうが現実に即している（吉満 2017）。しかし、中級のドイツ語授業では日常生活で使用される語彙や文法はある程度学習済みであり、映画のセリフを教材として、新たな語彙や表現の学習も可能であると考えられる。本稿では、筆者が担当する中級ドイツ語のクラスにおいて行った授業実践と実践後に実施したアンケート調査の結果を紹介し、教材としての映画の可能性を考察する。

2. 映画導入の意図とその方法

2.1 中級授業における映画の位置づけ

映画を教材として使用したのは、いわゆる中級のクラスである。このクラスは、広島大学外国語教育研究センターの提供する「ドイツ語プロフェッショナル養成特定プログラム」のクラスで、

1年次に週2～4コマの授業を履修した2年生が履修している。映画は、前期は毎月1回、合計4回、後期は連続で9回にわたり教材として使用した。本稿で紹介する実践例は、次のような学習目標を持っている。

- ・学習した語彙や表現を映画の中で再認識する
- ・セリフを通じて新しい語彙や表現を学習する
- ・セリフを吟味することで、映画の理解を深める
- ・映画を通じて、新たな知識を獲得する

2.2 使用した映画

授業で使用した映画は、2014年にドイツで制作された『Im Labyrinth des Schweigens (沈黙の迷宮で)』である。この映画は日本でも『顔のないヒトラーたち』というタイトルで2015年に公開されている。主人公である若い検事のヨーハン・ラートマンが、検事総長であるフリッツ・パウアーの下で、第2次世界大戦中にアウシュヴィッツ絶滅収容所でホロコーストに関わった者を裁くためのフランクフルト裁判を開始すべく捜査をする過程を描いた「歴史ドラマ」である。したがって、史実に基づいてはいるが、登場人物は一部を除きフィクションであり、ストーリーもフィクションである。

この映画を使用した理由は次のとおりである。

① 受講者にあまり知られていない史実をテーマとしていること

受講者たちは、中等教育において第2次世界大戦中のナチスとホロコーストについてある程度学習しており、それらに対する関心も総じて高い。しかしその知識は受講者によってかなり差があり、ホロコーストそのものについても「ユダヤ人の大量虐殺」というキーワードに矮小化されていることが多い。ましてや、戦後のドイツおよびドイツ人がナチスとホロコーストの歴史とどのように向き合ってきたのかということについて、ほとんどの受講者は全く知識を有していない。この映画では、かつてのナチス党員や親衛隊員がその過去を隠して戦後のドイツ社会で生きていたこと、主人公のような1930年代生まれの若い世代のドイツ人たちの多くがナチスの犯罪を知らなかったこと、そして自らホロコーストを生き延びたヘッセン州の検事総長フリッツ・パウアーがフランクフルト裁判を指揮し、ナチスの犯罪をドイツ人自らが裁くという偉業を成し遂げたことが描かれており、これらは受講者にとって新しい知識となると考えた。

② 史実が理解しやすいこと

この映画は、ドイツ映画メディア評議会 (Deutsche Film-und Medienbewertung) から「特に価値の高い映画」の評価を受けた映画である。史実を基にしたフィクションであり、「ドラマ」としての完成度も高い。それゆえ単なる「青春ドラマ」として捉えられてしまう危険性もあったが、登場する史実はフィクションではなく、ドラマの要素によって史実が理解されやすいのではないかと判断した。また、映画はセットや小道具、衣装などを用いてその時代の雰囲気も表現されており、見る者をその世界に引き込んで史実を体感させる力を持っている。これらの要素も史実の理解に役立つと考えた。

③ 登場人物に受講者たちが感情移入しやすいこと

主人公ヨーハン・ラートマンは20代の若き検事であり、それを演じるのはドイツの若手二枚目俳優アレクサンダー・フェーリンクである。ラートマンは誠実に、しかも情熱を持ってナチス

の犯罪を暴こうと奔走する。母親の再婚や尊敬していた父親の過去に悩み、恋もする。恋に落ちる女性は美しく、戦後の経済復興の波に乗り経済的にも自立しているが、彼女の父親も戦時中の暗い過去を背負っている。このように、若い世代の男女が登場し、それぞれの悩みを抱えつつもそれを克服し成長していく過程が描かれており、登場人物と年齢が近い受講者たちの感情移入が誘発されると考えた。感情移入することで、映画そのものへの興味が湧き、学習に対する動機付けとその維持に役立つと考えたからである。

④ 暴力や残忍な行為、性描写がないこと

一般的に暴力行為や残忍な行為、過度に激しいラブシーンや性描写には嫌悪を感じる受講者もいる。この映画にもラブシーンは登場するが、そのシーンはごく短いものである。またこの映画は、映画自主規制機構（Freiwillige Selbstkontrolle der Filmwirtschaft GmbH, 通称 FSK）により 12 歳からの視聴が可能であると規定されていることから、授業での使用は問題ないと判断した。

2.3 導入方法

映画は、前期に 4 回、後期に 9 回の合計 13 回の授業にわたり導入した。導入のプロセスは次のとおりで、それぞれの段階に応じて日本語字幕版とドイツ語字幕版を使い分けた。

第 1 段階：映画のストーリーと背景を理解する（日本語字幕版）

第 2 段階：ドイツ語のセリフを確認する（ドイツ語字幕版）

第 3 段階：ドイツ語のセリフの吟味する（ドイツ語字幕版）

それぞれの段階での授業の回数と概要は、表 1 のとおりである。

表 1 映画を導入した授業の流れ

第 1 段階	
第 1 回	<ul style="list-style-type: none"> ・グループに分かれて担当チャプターの視聴（日本語字幕版） ・チャプターのストーリーをまとめる ・登場人物の情報を集める
第 2 回	<ul style="list-style-type: none"> ・チャプターのストーリーを静止画とシークエンスを使って発表する（日本語字幕版） ・登場人物についての情報を全体で共有する
第 3 回	<ul style="list-style-type: none"> ・チャプターを文章でまとめる⇒レポート課題として提出 ・背景知識を収集してまとめる⇒レポート課題として提出
第 2 段階	
第 4 回	<ul style="list-style-type: none"> ・指定されたシークエンスの日本語字幕を記録する ・日本語字幕に対応するドイツ語字幕を記録する ⇒夏休みの課題：自分でオリジナルの日本語字幕を作る
第 3 段階	
第 5 回～ 第 13 回	<ul style="list-style-type: none"> ・夏休みの課題を全員で吟味する ・セリフを吟味したシークエンスをドイツ語字幕版で鑑賞する
第 14 回	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループが調べた背景知識の共有 ・教員による背景知識の補足説明 ・アンケート調査

2.3.1 第1段階「ストーリーと背景を理解する」

この段階は、ストーリーとその背景となる歴史的な知識を理解させることに主眼を置いた。映画を最初から最後まで全員で見ることを行わず、映画の日本語字幕版DVDは6つのチャプターから構成されているので、クラスを6つのグループ（1グループは3名または4名）に分けてチャプターの担当を決め、担当チャプターのみを各グループに鑑賞させた。DVDはグループの数だけ準備し、パソコンを使用して視聴させた。また、同時に複数名が鑑賞できるよう、イヤホン・スプリッターを使用した。鑑賞の際には、次のような課題を与えた。

課題1：担当するチャプターのストーリーをまとめ、クラスで発表する。

その際には、視聴するチャプターから静止画として2カ所と1分程度のシーケンスを見せて発表する。

課題2：それぞれの登場人物についての情報をメモする

各チャプターは15～20分で、視聴した後に時間を与えて、どの静止画やシーケンスを使うかをグループで相談し、それらの登場するタイムカウンターをメモさせた（図1）。また、課題2のためには、メモをするためのプリント教材（図2）を準備し配布した。

発表の際に使用する静止画（2カ所）とシーケンス （タイムカウンターの数字を記入してください）	
Gruppe
Chapter
静止画 1：
静止画 2：
シーケンス： から まで

図1 静止画とシーケンスのメモ



Im Labyrinth des Schweigens 登場人物についての情報（職業・年齢・履歴・他の登場人物との関係・問題に対しての姿勢や立場など）をメモしてください。（カッコ内は俳優の氏名）	
Johann Radmann(Alexander Fehling) 	Marlene Wandrak(Fiederike Becht) 

図2 登場人物のメモ

各グループの発表では、ほぼすべてのグループが静止画やシークエンスの説明に終始し、「チャプターのストーリーをまとめる」という視点が抜け落ちてしまっていた。そのため他のグループの発表を聞いて、映画全体のストーリーを把握することができなかった。そこで、第3回の授業において、「背景知識を調べてまとめる」という課題の他に、本来は予定していなかった「ストーリーをなるべく詳しく文章化する」という課題を各グループに与えた。「背景知識」のテーマは各チャプターに登場する事物や人物についてであり、教員が設定して与えた（表2）。

表2 背景知識のリスト

チャプター	調べる事物／人物
Chapter 1	IG-Farben と IG-Farben Haus (IG フェルベンと IG フェルベンハウス)
Chapter 2	Fritz Bauer (フリッツ・バウアー)
Chapter 3	Josef Mengele (ヨーゼフ・メンゲレ)
Chapter 4	Adolf Eichmann (アドルフ・アイヒマン)
Chapter 5	Mossad (モサド)
Chapter 6	Frankfurter-Auschwitz-Prozess (フランクフルト裁判)

この課題はグループ内でさらに2つのグループを作り担当を決めて行わせた（図3）。希望者には、担当するチャプター（日本語字幕）を再度視聴する機会も与えた。課題は、レポートとしてワードファイルの形式で提出させ、コメントを入れてフィードバックを行った。フィードバックを受けて受講者はレポートを完成させ提出した。なお、このレポートは後期に行った第3段階での教材としても使用した。

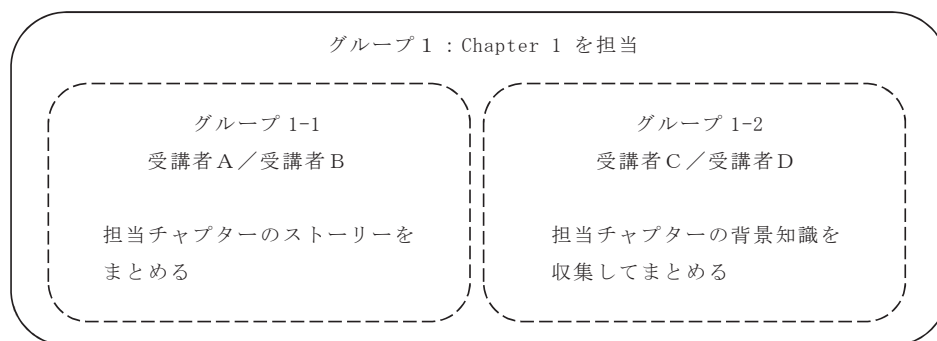


図3 字幕記録の作業形態

2.3.2 第2段階「ドイツ語のセリフを確認する」

第2段階では、日本語字幕版とドイツ語字幕版のセリフを書き写すという作業を、第1段階と同一のグループで行わせた。ドイツ語版のDVDには Untertitel für Hörgeschädigte（耳の不自由な人のための字幕）を表示する機能がついている。この字幕は、セリフのすべてが文字化されたものではない。長いセリフは簡略化されていて、実際のセリフと合致していない箇所が散見される。具体的には、間投詞や副詞などの省略などである。この点については受講者にあらかじめ説明し、「聞き取れた部分は、字幕に加筆するように」と指示をした。

セリフを書き写すシーケンスは、第1段階で受講者が選んだシーケンスを可能な限り尊重しつつ、セリフの数やシーケンスの長さが同じになるよう、調整して教師側でそれぞれのチャプター毎に2つのシーケンスを指定した。各グループを2人1組に分け、担当するチャプターの2つのシーケンスの「ドイツ語字幕」と「日本語字幕」の両方を記録した(図4)。この作業はCALL教室で行い、各グループに4台のパソコンが使えるようにした。4台のパソコンはそれぞれ、①日本語字幕版を見るためのパソコン、②日本語字幕を書き写すためのパソコン、③ドイツ語字幕版を見るためのパソコン、④ドイツ語字幕を書き写すためのパソコンとして使用させた。

この作業は日本語字幕とドイツ語字幕をそのまま書き写すだけであったが、タイプミスも多く見られたため、データを提出させた後、教師側で修正をほどこした。その上で、各シーケンスの日本語字幕がドイツ語字幕と大きく異なる箇所や、意識がされている個所をマーキングしてデータを担当の受講者に戻し、マーキングされた箇所に注意をして「自分の翻訳」を作成するように指示した。これを夏休みの課題として提出させた。

「自分の翻訳」の作成は、本稿の冒頭で述べたように「学習した語彙や表現を映画の中で再認識する」および「セリフを通じて新しい語彙や表現を学習する」という学習目標を達成するための作業である。既習の語彙や表現を再認識することは、ドイツ語字幕を記録する過程において可能である。しかし、未習の語彙や表現は、セリフを聞くだけで学習されるものではない。そもそも未知の語彙や表現を聞き取り、前後関係から意味を推測するということは、その言語によほど習熟していない限り不可能である。新たな語彙や表現を学習するためには、ドイツ語字幕を記録するだけでなく、それらを精読して未習の語彙を「未習である」と認識し、辞書でそれらの意味や用法を調べることが必要である。「自分の翻訳」を作成させたのは、このような学習を誘発するためであった。

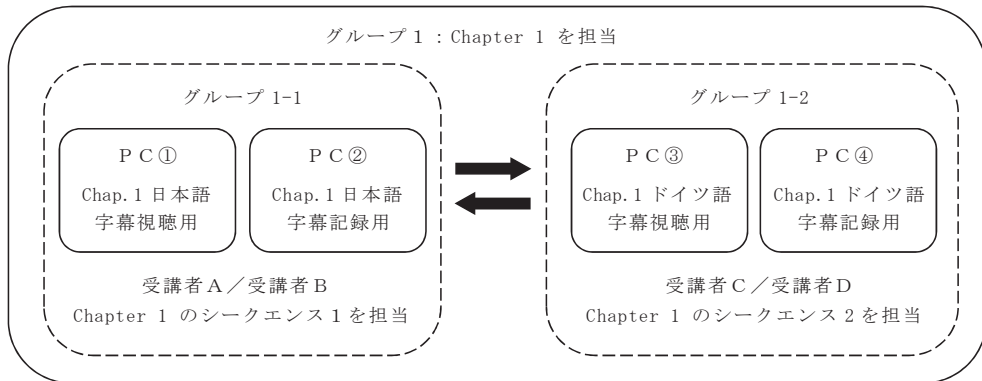


図4 字幕記録の作業形態

2.3.3 第3段階「ドイツ語のセリフを吟味する」

第3段階では、受講者が提出した夏休みの課題を教材にして、受講者が日本語に翻訳したドイツ語のセリフを吟味した。受講者の翻訳には問題がある場合も多く、あらかじめ教師側で目を通し、問題のある箇所のドイツ語と日本語の双方を赤字でマーキングした上で配布した(付録1)。この教材を使用した授業は次のような流れで行った。

1. 第1段階で作成したストーリーのまとめを読み、吟味するシークエンスの前後関係を把握する
2. ペアでドイツ語版字幕を声に出して読む
3. ドイツ語版字幕と受講者の翻訳を照らし合わせて吟味する
4. クラスで問題のある箇所について話し合う
5. 当該のシークエンスをドイツ語字幕版で見る

第1段階および第2段階では、受講者たちは自分が担当したチャプターしか視聴しておらず、この段階で初めて他のチャプターのシークエンスを視聴することになる。また、第1段階で他のグループの発表を聞いて全体のストーリーを把握するはずであったが、前述したように実際の授業ではそれがうまく行かなかったため、受講者がまとめた各チャプターのストーリー（付録2）を配布し、ペアワークでセリフを吟味するシークエンスの前後関係を確認させた。

授業ではまず、「このシークエンスでは、誰が登場するのか?」、「登場人物はどこにいるのか?」、「登場人物は何について話しているのか?」ということペアワークおよび全体で確認した。その上で、セリフをペアワークで音読させ、その後セリフを吟味するという作業を行った。

セリフを吟味する作業では、受講者が誤訳をしている箇所に重点を置き話し合った。また、字幕における人物名のカタカナ表記の多くはドイツ語の発音に忠実でなく、その点についても発音と正書法の規則を参照させ、表記について話し合った。セリフを吟味した上で、それぞれのシークエンスをドイツ語字幕版で鑑賞した。

すべてのチャプターのセリフを吟味した後、受講者がレポートとしてまとめた背景知識を配布し、それらを読ませた。特にフリッツ・パウアーとヨーゼフ・メンゲレについては、映画ではどのような脚色がなされているのかを話し合った。

3. 授業に関するアンケート調査

3.1 調査の対象と内容

アンケートは、後期の授業に参加した13名を対象に質問用紙を用いて、授業で行った作業や課題がそれぞれドイツ語学習にどれくらい役に立ったのかを5件法（とても役に立った・どちらかといえば役に立った・どちらでもない・あまり役に立たなかった・全く役に立たなかった）で尋ねた。加えて、「とても役に立った」または「どちらかといえば役に立った」と回答した場合には、「語彙や表現」、「文法」、「発音」、「リスニング」、「リーディング」の5項目ではまる項目をすべて挙げてもらった。また、この授業と通常のドイツ語授業とを比較した場合の良い点や悪い点と、この授業に対する意見や感想も自由に記述してもらった。

授業での作業および課題は以下の6つである。

- 1) 担当するチャプターの日本語字幕版での視聴（授業）
- 2) ドイツ語字幕の書き写し作業（授業）
- 3) ドイツ語字幕の翻訳（課題）
- 4) 人物や史実に関するレポート（課題）
- 5) ドイツ語字幕の吟味（授業）
- 6) 吟味した箇所のドイツ語字幕版での視聴（授業）

次項では、この調査結果を紹介し考察する。

3.2.1 日本語字幕版の視聴について

日本語字幕版で映画を視聴することについて、約8割の受講者がドイツ語学習に役に立ったと回答している(図5)。役に立った分野として13名中9名が「リスニング」を挙げている(図6)。日本語字幕版の視聴は導入部であり、目的は映画の内容を理解することであったが、この結果からは、受講者がこの段階ですでにドイツ語のセリフを聞き取ろうとしていたことがうかがえる。

リスニングにおいては、全く学習したことのない語句や表現を聞き取ることは非常に難しいが、「語彙や表現」や「発音」という回答も見られた。これは、「新しい語彙を聞き取った」ということではなく、既習の語彙や表現が登場し、それらを聞いて認識した、あるいは日本語字幕を見てそれらを認識したと考えられる。

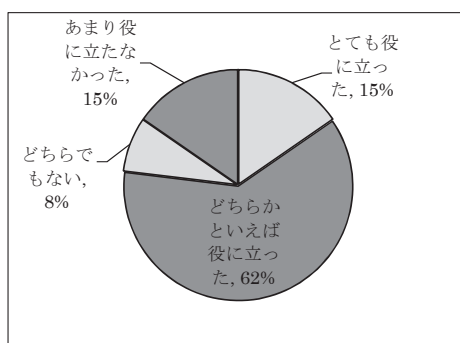


図5 日本語字幕版の視聴は役に立ったか

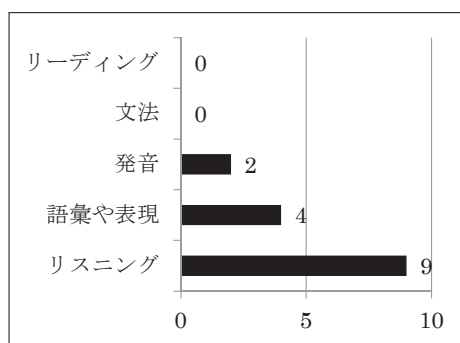


図6 日本語字幕版の視聴が役に立った分野

3.2.2 ドイツ語字幕の書き写し作業について

ドイツ語の字幕を書き写す作業については、約7割の受講者が役に立ったと感じている(図7)。役に立った分野として「リーディング」の他に、「語彙や表現」と「文法」が挙げられていることから(図8)、受講者が字幕を単に書き写すだけでなく、その際に語彙の意味を考えたり、文の構造を意識したりしていたことがうかがえる。

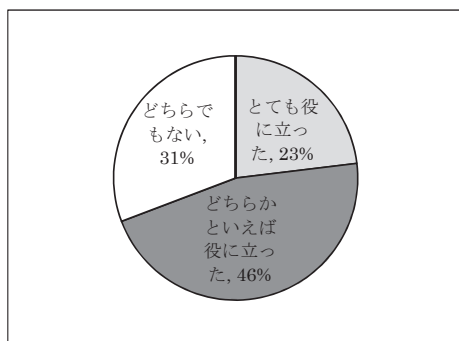


図7 ドイツ語字幕の書き写しは役に立ったか

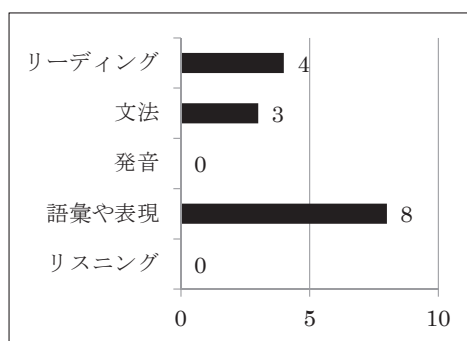


図8 ドイツ語字幕の書き写しが役に立った分野

3.2.3 ドイツ語字幕の翻訳作業について

書き写したドイツ語字幕を、受講者は夏休みの課題として翻訳した。その作業については1名が「どちらでもない」と回答したが、それ以外は役に立ったと感じている（図9）。

ドイツ語から日本語への翻訳であるため、この作業は必然的に「リーディング」、「文法」および「語彙や表現」の学習となる。1名が「発音」を挙げているが（図10）、この作業では音声教材は使用していないので、語彙を辞書で引き、その際に発音も合わせて学習したことがうかがえる。

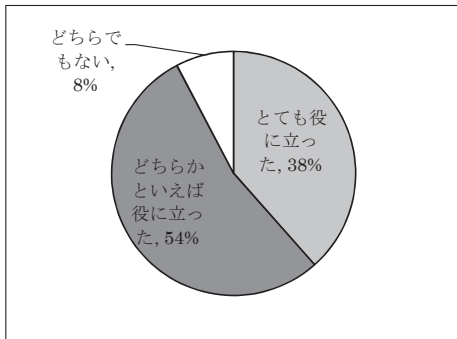


図9 ドイツ語字幕の翻訳作業は役に立ったか

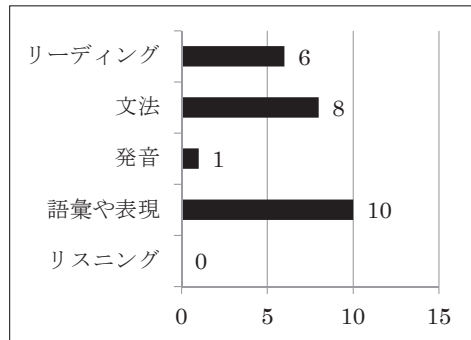


図10 ドイツ語字幕の翻訳作業が役に立った分野

3.2.4 人物や史実に関するレポートについて

人物や史実に関するレポートは、全員が行った作業ではない。したがって「どちらかといえば役だった」と回答した受講者は、この作業を行った者と思われる（図11）。役に立ったと感じる分野として「リーディング」と「語彙や表現」が挙げられているが、レポートは日本語によるものである。したがって、レポートを執筆することが直接ドイツ語学習に役立ったというのではなく、人物や史実に関する日本語での知識が、ドイツ語字幕の翻訳や吟味の段階で役に立ったと解釈すべきであろう（図12）。

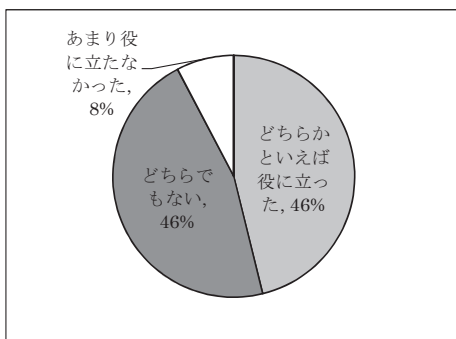


図11 人物や史実のレポートは役に立ったか

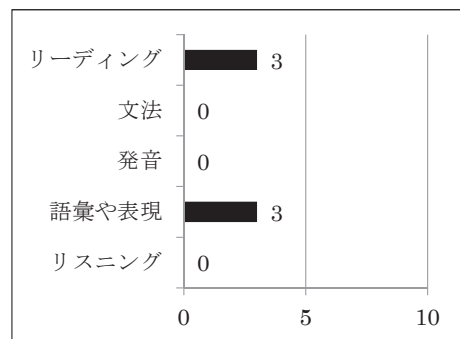


図12 人物や史実のレポートが役に立った分野

3.2.5 ドイツ語字幕の吟味について

受講者が夏休みの課題として提出したドイツ語字幕の日本語翻訳は、後期の授業で教材として

使用し、クラスで翻訳を吟味した。映画の字幕は字数の制限があるため、意識や省略が多く見られる。授業では、このような箇所と合わせ、受講者が誤訳した箇所を中心に吟味した。その際には、当該のセリフがどのような前後関係の中で発せられているのか、あるいはどのような意図を持って発せられているのかを話し合った。また、誤訳された語彙は辞書で再確認させ、文の構造を吟味させた上で、どの訳語が当該のセリフにとってふさわしいのかということも話し合った。アンケートの結果からは、全員がこの作業をドイツ語学習に役立ったと感じていることが分かった（図13）。

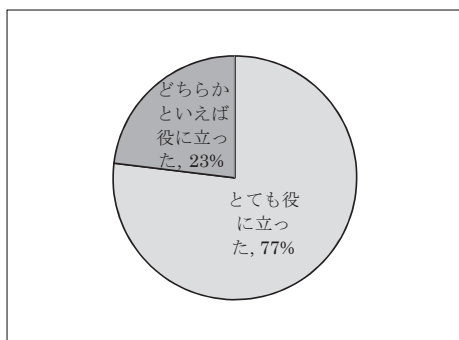


図13 ドイツ語字幕の吟味は役に立ったか

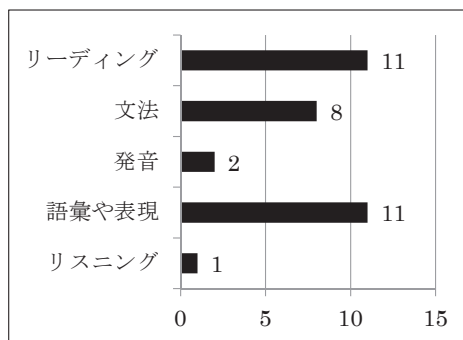


図14 ドイツ語字幕の吟味が役に立った分野

3.2.6 ドイツ語字幕版の視聴

受講者が翻訳したセリフを吟味した後、その都度当該箇所のドイツ語字幕版を視聴した。この作業について、1名は「どちらでもない」と回答したが、それ以外の12名は役に立ったと感じている（図15）。役に立ったと感じる分野として11名は「リスニング」を挙げており、十分に吟味した上でセリフを聞くことで、セリフがより詳細に聞き取れたのではないと思われる。他方、3名が「リーディング」を挙げているが、これらの受講者は視聴の際にドイツ語字幕に注目していたと考えられる（図16）。

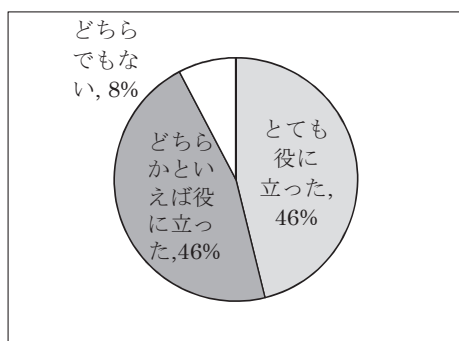


図15 ドイツ語字幕版の視聴は役に立ったか

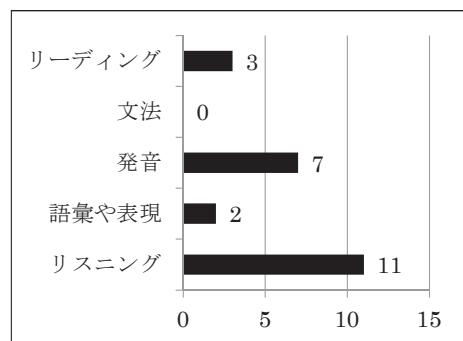


図16 ドイツ語字幕版の視聴が役に立った分野

3.3 授業に対する意見や感想

自由記述で「通常の授業と比べて良い点や悪い点」を尋ねたところ次のような記述が得られた。

- 受講者 A (1) : 通常の授業のときよりも訳す時、直訳だけでは訳せない部分が多かったので意識をする練習にもなりました。
- 受講者 B (1) : ドイツ語の文章をじっくり考える授業はあまりなかったので、難しかったですが、とてもおもしろかったです。
- 受講者 C (1) : 映画を使うことで、ただテキストを見て学ぶよりも、より興味を持ち、また歴史に着目してできるので、通常の学習よりも学べるが多かったと思う。記憶は文字よりも画像のほうが残りやすいので、より表現が定着しやすくなると感じた。
- 受講者 D (1) : 文法事項などだけでなく、ドイツの文化や登場人物の発するセリフの裏側にある文脈を探る解釈が非常に勉強になった。
- 受講者 E : テーマが少し重かったのと、専門用語や日常ではめったに使わない語彙が多かったところが、「どうせ使わないから」という気を起こさせた点で悪かったと思います。
- 受講者 F : チャプターが6つあったので、少し進行が遅いと感じた。普通の授業と比べて進んでいる感覚がなかった。

この授業に対する意見や感想としては、以下のような記述が得られた。

- 受講者 A (2) : 映画で勉強することでドイツ語の文法だけでなく、歴史や背景を知ることができました。
- 受講者 B (2) : この授業をきっかけに映画鑑賞会に参加するようになって、いろいろおもしろいドイツ語の映画に出会えたので、とても良いと思いました。他の授業より波及効果が高かったです。
- 受講者 C (2) : 映画だけでなく、小説や新聞も用いていくとおもしろいと思う。よりストーリーを楽しむためには背景知識が不可欠だと感じた。
- 受講者 D (1) : 映画という総合的な資料によって多方面からドイツそのものに触れられることがとてもおもしろかった。
- 受講者 G : ドイツ語を無理なく取り組めて良いと思いました。
- 受講者 H : 経済学部の私からすると、文学部的で新鮮でした。ここまで深く作品を鑑賞することができて新鮮でした。
- 受講者 I : ドイツの映画はあまり見る機会がないので、ドイツ語の勉強はもちろん、ドイツ映画の撮り方なども知ることができたので、すごく楽しかったです！これからも他のジャンルのドイツ映画を見たいと思います。
- 受講者 J : 楽しく学ぶことができ良かった。日常的な表現も学べそうなので、今後見る機会があれば積極的に見ていきたい。
- 受講者 K : セリフの一つ一つがしっかりとつながっていることに気づけて、すごくよかったなと思いました。字幕が視覚障害者のためのものだったから、音楽の流れているところで「～な音楽」という文字が出るのが興味深かったです。

自由記述からは、受講者にとって映画を教材とした授業は概ね好評であり、映画で取り扱われているテーマや史実のみならず、映画を鑑賞することに対する興味も喚起できたことが分かった。

他方、通常の授業や教材についての問題点を浮かび上がらせている記述もある。受講者 B (1) の記述は、通常の授業でもドイツ語のテキストを聞いたり読んだりしているが、それが表面的な理解や翻訳でしかないことを示唆している。これは、受講者 C (2) が小説や新聞などの使用を提案していることから分かるように、コンテンツの問題である。初級の授業では、語彙であれ文法であれ、すべてが「新しい」ことであり、多くの学習者にとっては「ドイツ語そのものを理解すること」それ自体が楽しさをもたらす。もちろん、初級の授業においても、導入するテキスト（文字で書かれたものだけでなく、音声テキストも含む）が、ドイツ語そのものの知識だけでなく、学習者にとって何らかの新しい知識や認識をもたらすことが望ましいが、コンテンツにこだわり過ぎると学習者への負荷が大きくなる。したがって、初級の授業で取り扱われるテキストのテーマは、学習者にとって理解しやすい日常生活に関するものが多い。中級の授業では、それまでの学習歴や学習習慣などの影響もあり、ドイツ語そのものの学習がある種のルーティンワークになりがちである。したがって、新しい語彙や文法を学ぶことは重要ではあるが、それらに加えて、あるテーマについて自ら深く考えたりディスカッションをしたりして、新たな知識や認識を得ることがないと、学習が表面的なものになる可能性がある。

また、受講者 E にとっては映画に登場する語彙や表現は「どうせ使わないもの」と認識されている一方、受講者 J は映画から日常的な表現が学べると考えている。受講者 E はこの映画のテーマを少し重いとも感じていることから、会話の中に登場する法律用語に特に反応していたと考えられる。この 2 つの記述からは、学習者はいわゆる「使える表現」を学びたいと強く思っていることがうかがえる。事実、この授業では、授業の感想やメッセージを毎回受講者に書いてもらうのだが、授業中に「このフレーズは日常会話でもよく使う」と言及すると、必ず複数の受講者から「今度使ってみようと思います」、「よく使うフレーズが学べてよかった」といった感想が寄せられる。これらのことから、コンテンツも重要ではあるが、テキスト中に汎用性の高い語彙や表現が含まれていることが学習者にとって望ましいことが分かった。

4. まとめ

今回の授業実践とアンケートの結果から、中級ドイツ語授業において映画を教材として使用することは、テキストをより深く理解することや、言語以外の新たな知識を獲得することに寄与することが分かった。また、授業において映画を使用することの主眼はリスニングであると筆者自身も考えていたが、リーディングに有効な使い方もできることも分かった。これまでも「映画鑑賞マラソン」の実践や通常授業での映画鑑賞を通じて、映画鑑賞が学習者のドイツ語に触れる頻度を高め、学習効果や動機付けを強化することを漠然と認識していた。しかし、セリフの文構造や語彙を吟味させることで、「読み解く」という行為に「より深い映画鑑賞」という付加価値が付与され、「読む」ことへの動機付けが強化されるということは新たな発見であった。

映画を授業に用いるためには、準備のために多くの時間が必要である。まず教師自身が映画の内容について熟知していないと導入は難しく、筆者も使用した映画を何度も視聴した。また、学習者が滞りなく作業できるように、プリント教材や DVD そして機材の準備、背景知識の下調べなど入念な計画が不可欠であった。しかし、この授業実践を通じて、筆者自身もこの映画や映画に登場する実在の人物や史実についての理解をより深めることができた。それと同時に、1本の

映画を長期にわたり使用することの有効性や可能性を新たに認識した。

映画を使用した授業の最終日には、受講者からのコメントに「初めて見た時と比べて、全然違うように見えたことがとてもおもしろかった」、「戦後のユダヤ人のことや、登場人物（フリッツ・バウアーやヨーゼフ・メンゲレなど）が実際はどうであったのか分析できた」といった記述が見られ、筆者の意図していた授業の目的が達成されたと感じられた。また、「字幕の分析が終わってさびしいですが、通常授業がんばりたいです」というコメントも寄せられ、今回の実践が受講者にとっても充実したものであったことを感じた。

しかし反省点もある。今回の実践が前・後期にわたり行われたこと、そしてグループで視聴したチャプターの内容を発表することが、ストーリー全体の把握にうまくつながらなかったため、後期には受講者が映画のストーリーを忘れてしまっていた。各グループがまとめたストーリーを配布していたが（付録2）、それらを読むように指示するだけでは不十分で、セリフを吟味する際に、チャプターやシークエンスの内容をその都度確認しなければならず、予想以上に時間がかかった。ストーリーが理解できているかどうか十分に確認した上で、セリフを吟味する段階に入るべきであった。また、第1段階で登場人物に関する情報を集めさせたが、これについても話し合いが十分ではなく、このこともストーリー全体の把握がうまくいかなかった一因と考えられる。

今後はこれらの反省を踏まえて、この映画を使用した授業の授業形態や時間配分などを改善し、さらなる実践を重ねたい。

参考文献

- 浅尾弘子 (2011). 映画「あゝ野麦峠」「蟹工船」で生徒は何を考えたか、『歴史地理教育』771. 30-35. 歴史教育者協議会.
- 石出みどり (2006). 映画で世界を学ぶ「白バラの祈り」、『歴史地理教育』703. 52-55. 歴史教育者協議会.
- 川崎沙織／榎木貴之 (2015). 映画を用いた大学英語授業：語用論的な力の育成をめざして、『東京大学大学院教育学研究科紀要』55. 395-406. 東京大学大学院教育学研究科.
- 倉林直子 (2017). 映画を利用したリスニングに関する授業の一考察、『川村学園女子大学研究紀要』28(1). 33-46. 川村学園女子大学図書委員会.
- 佐藤信行 (1998). ドイツ語授業におけるひとつの試み：〈ドイツ語学習〉の〈映画〉から〈映画〉の〈ドイツ語学習〉へ、『大学教育研究年報』4. 101-104. 新潟大学.
- 田畑圭介 (2016). 映画を用いたポライトネス表現に関する視覚的学習支援について、『神戸親和女子大学言語文化研究』10. 1-12. 神戸親和女子大学文学部総合文化学科.
- ソルダン・ドルニエイ (2006). 『外国語教育学のための質問紙調査入門』. 松柏社.
- 水澤祐美子 (2016). 英語リスニング能力向上のための映画教材の活用、『Lingua』26. 97-111. 上智大学言語教育研究センター.
- 山室信高 (2017). CALL用語学教材としての宮崎駿アニメ『魔女の宅急便』ドイツ語版を例に一、『経済論集』42(2). 143-153. 東洋大学経済研究会.
- 吉満たか子 (2017). ドイツ語学習における映画鑑賞の効果、『広島外国語教育研究』20. 307-318. 広島大学外国語教育研究センター.
- Völcker, B. (2014). Im Labyrinth des Schweigens: Didaktisierungsvorschlag des Goethe-Instituts Frankreich. Goethe-Institut Paris.

《付録 1：第 3 段階で使用した教材の例 1》

表の右の列が受講者の翻訳。灰色でマーキングした箇所は、日本語版字幕で意識や省略がされている箇所。下線部は受講者の訳に問題がある箇所（実際には赤字でマーキング）

Chapter 1 / Sequenz 1

日本語版字幕	ドイツ語版字幕	
グニールカ：決して許されない事態だ	Gnielka: Das ist ein Skandal! Ein Riesenskandal.	これはスキャンダルだ！大きなスキャンダルだ！
グニールカ：殺人鬼が野放しに	Gnielka: <u>Da läuft ein Mörder frei herum.</u> <u>Ein Mörder.</u> <u>Herr Kirsch erkennt den Mann.</u>	殺人犯が自由に辺りをうろついている。殺人犯だぞ。 <u>キーシュさんはその男を知っています。</u>
グニールカ：警察署を 3 箇所も回ったが、どこも耳を貸さない	Gnielka: Wir waren auf drei Polizeiwachen. <u>Aber die tun nichts.</u> <u>Nichts.</u>	私たちは 3 つの警察署に行きました。しかし誰も行動しない。 <u>誰もだ。</u>
フリートベルク検事正：グニールカさんレントシャウ紙はネタ切れかね？	Feirdberg: Guten Tag, Herr Gnielka. <u>Auf der Suche nach einer Story für die Rundschau?</u>	こんにちは、グニールカさん。 レントシャウ紙はネタを探していますか？
グニールカ：ネタはありますよ、刑事正 アウシュヴィッツにいた武装親衛隊員が教師をしているんです。	Gnielka: <u>Die Story habe ich längst. Ein Mörder läuft frei herum, Waffen-SS, war in Auschwitz. Er ist jetzt Lehrer und unterrichtet Kinder.</u> <u>Interessiert Sie sich das?</u>	私は話をすでに持っています。 アウシュヴィッツにいた殺人犯、武装親衛隊が自由に辺りをうろついている。彼は今、 <u>先生であり子供たちに授業を教えています。</u> このことにあなたは興味ありますか？
フリートベルク検事正：あなたは実に短気な人だ	Freirdberg: Sie sind ein herrlicher Brausekopf.	あなたは素晴らしく短気だ。
ジーモン：もう帰ろう、どうせ無駄骨なんだ。	Simon: <u>Gnielka, ich will jetzt gehen. Das ist alles sinnlos.</u>	グニールカ、私はもう行くことにしよう。それはすべて無意味なことだ。

《付録2：第3段階で使用した教材の例2》

Chapter 1 ストーリー

ある日、ジーモンが街中を歩いていると、学校で教師として働く男性を見かけたが、その男性は以前、アウシュヴィッツにいた人だと気付く。ジーモンはその事を、記者グニールカに伝え、二人は検察に訴えに行く。戦後、ドイツでは、元ナチ党員は教師として働くことはできなかったからだ。

ジーモンとグニールカの訴えは、多くの検察官に無視されたが、主人公の若手検察官ヨーハンに興味を持つ。

Sequenz 1

駆け出しの検事ヨーハンは、それ以前はお役所仕事のように日々、軽犯罪を裁いており、小さな違反であってもまじめに取り組む正義感のある人物である。また、マレーネという女性が登場するが、彼女は、罰金刑の裁判でヨーハンと出会い、その後徐々にお互い惹かれあって行く。

ヨーハンが、その教師について調べると、その教師は以前アウシュヴィッツにいたということが明らかになった。ヨーハンは、そのことを、検事総長フリッツ・バウアーに伝え、教師は免職されるだろうと思っていた。その後、ヨーハンが、教師を免職したことを、記者グニールカに伝えるに行ったところ、教師は免職されていないこと、そしてさらに、自分たち若者がアウシュヴィッツ収容所についてほぼ無知であったことを痛感させられる。

Sequenz 2

このことがきっかけとなり、ヨーハンはさらに深くナチス、アウシュヴィッツ強制収容所について調べ始めることになる。

ある日、ジーモン、グニールカ、ヨーハンは、ジーモンの家にいた。ジーモンが、お酒に酔って眠っている間に、グニールカは、ジーモンが収容所にいたことを証明するための書類を探し始める。強制収容所にいたことを証明するものがないと、ジーモンは損害賠償を受け取ることができないからだ。ジーモン自身は、損害賠償の受け取りを拒んでいるため、グニールカが半ば無理やりに、損害賠償の受け取りをさせようとしたのだ。そして結果的に、グニールカとヨーハンはアウシュヴィッツに関する資料とそこで殺人が行われていたことが示されている資料を入手し、その資料を持ち、再び検事総長フリッツ・バウアーのもとに、収容所で行われていたことの報告と、免職されていなかった教師を再度免職してもらうように抗議へ向かう。

ABSTRACT

Using the Movie “Im Labyrinth des Schweigens” in an Intermediate German Class

Takako YOSHIMITSU

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

This article reports the use of the movie “Im Labyrinth des Schweigens” in an intermediate German class at Hiroshima University, along with the results of a questionnaire survey conducted after the class.

The lesson consisted of three stages. In the first stage, the students were divided into six groups, with each group watching one of the six episodes of the Japanese subtitled version of the movie. After watching, the students summarized the stories of the episodes they had been asked to watch, and wrote reports on the characters appearing in the movie and the historical facts they learned.

In the second stage, the students watched two sequences chosen from among the episodes they had watched in the German subtitled version, and wrote down the German subtitles. The German transcripts were then translated into Japanese by students. In the third stage, the students’ translation was used as teaching material in the class, and the translation was discussed from the perspective of pragmatics.

Previous studies in English language education have reported that movies are effective for listening training, as well as contributing to learner motivation. However, from the results of this survey, it was found that this teaching method is also suitable for reading training in intermediate German classes. Students found that translating movie transcripts into Japanese is more interesting than regular text translation. Also, by translating the movie transcript, students’ understanding of the contents of the movie was deepened.